

ルリタテハは通常市街地で見ることが少ないチョウですが、西畑や松波町ではよく見かけます。それは幼虫がユリ科植物の葉っぱを食べるからで人家庭先に植栽されたホトトギスが発生源です。加古川市志方町のような里山が残る地域ではサルトリイバラ（別名サンキライ）やヤマユリなどから発生しています。私の郷里高知市ではサンキライの大きな葉っぱで包み込んだモチを芝モチとって、蒸して食べる習慣があり、子供の頃にはこの葉っぱをとり山に入り、するどいトゲに困惑したものです。

さてルリタテハですが、チョウになってからは樹液や果物の果汁、腐敗物などに好んで集まり、花を訪れるのは越冬後の観察例が多くなります。市街地では一体何をエサとしているのか心配になるのですが、西畑高砂公園のテニスコートなどでは毎年見かけます。もっともルリタテハはとても敏活に飛ぶため、



チョウに関心のないひとには何か黒いチョウが飛んでいったとしかわかりません。でも、ルリタテハは路面や倒木などに羽を広げてとまることが好きなチョウで、その光景に出くわした人には濃紺の地色にみごとに美しく映えるルリ色の帯状模様が目に飛び込んできます。「えっ、こんなきれいなチョウが身近にいたのか」という瞬間です（好みによってはアカタテハ、あるいはヒオドシチョウの方がきれいだという人がいるかもしれませんが）。写真は加古川市志方町の里山、春の陽光が射しこむ林床で日光浴を楽しんでいるところです。人の気配にはとても鋭敏ですぐに飛

び逃げますが、スイスイヒラリと同じ場所にまた舞い戻ってきます。これは縄張り（テリトリー）を張るというタテハチョウ類に多くみられる面白い習性です。自分よりはるかに身体の大いヒヨドリを領域侵犯まかりならぬと追いかけるのを目にしたこともあります。木の葉や他のチョウ、トンボなど“動く物体”を激しく追飛する占有行動です。

アカタテハと違ってルリタテハには季節変異があり、秋に発生する個体がことさら美しくなります。ルリ色の帯模様がえもいわれぬ深みのある色調となり、翅形も秋型の方がより芸術性を増すように思うのは私だけでしょうか。1962年の写真は実に47年も前の私の所蔵標本ですが、きちんと管理をすれば美しい色彩がまだ楽しめます。1981年の秋型標本は西畑在住時、庭のホトトギスで自然発生した個体の記録標本です。タテハチョウの仲間は羽の表裏が著しく異なっているものが多く、総じて美しい翅表にくらべて裏は地味な褐色や黒っぽい樹肌に似た模様です。これは樹木や枯葉の上などに羽を閉じて静止した際みごとな保護色となって、その身を外敵から守ってくれる自然の妙です。ところで、このチョウの蛹には金色



に輝く紋が見られます。ツマグロヒョウモンの蛹にもみごとな金色紋がありますが、異なる食草で育つこれらチョウの蛹に共通して見られるこの金色はいったいどういう植物成分から生まれるのでしょうか。沖縄や八重山諸島には蛹全体が金色に光り輝くオオゴマダラやヤエヤマイチモンジというチョウもいます。自然界の不思議は尽きることがありません。

ルリタテハも北海道から八重山諸島まで広く分布しますが、南西諸島では2002年の与那国島産標本に示すように、ルリ色帯がより内側に偏る亜種として区別されています。なお、この標本は前翅の白紋が青色となった、蝶仲間が“ルリイチモンジ”と呼んで珍重する台湾産に似た個体です。

ルリタテハは崖の縁や岩の下面、浅い土の中などでの越冬観察例がありますが、越冬後の羽はほとんど傷んでいません。同じタテハチョウ科のヒオドシチョウが、羽化したばかりの新鮮個体ではすばらしく美しいのに、越冬後には見るも無残なボロボロの羽となって飛び出してくるのは好対照です。



Sep. 14, 2002 与那国島